

○ 声明

日本の司法は 記憶する能力すら 失ったのか

強制動員問題解決と対日過去採算のための共同行動、
全国民主労働組合総連盟、韓国労働組合総連盟

日本の司法は記憶する能力すら失ったのか

去る8月27日、日本の東京高等裁判所が群馬県の「群馬の森」にある「朝鮮人追悼碑」を撤去せよという判決を下した。この追悼碑は、日帝強占期に見知らぬ日本の地に強制動員され、強制労働を強いられ亡くなられた朝鮮人被害者を追悼するために、2004年4月、日本の労働者が中心になり市民たちが力を合わせて設置した碑である。「記憶、反省、そして友好」を象徴する記念碑として、強制動員被害の真実を市民たちに伝える一方、アジアの民衆との友好と連帯を作っていくための取り組みでの結実であった。

しかし、日本社会が保守化されるにつれ、追悼碑に向けた右翼の攻撃も続いてきた。都市公園に設置される許可期間が終わるのをきっかけに、右翼は碑文が「反日的」であるという理由をあげ、許可の更新ができないよう県に圧力をかけ、県当局も結局、更新を拒否した。県の非常識な決定に市民たちは行政訴訟を起し、一審の前橋地裁は県の裁量権の濫用を理由に、県の決定が間違っているとして市民の手をあ

げてくれた。ところが、今回の控訴審判決で東京高等裁判所は地裁の判決を覆し、卑怯にも「政治的」という口実をあげ県の決定が正当だと判決した。

「記憶、反省、そして友好の追悼碑を守る会」も指摘したように、この裁判闘争は日本社会の保守化によって拡大し、侵略戦争と植民地支配という暗い歴史を否定する歴史修正主義とのたたかいであった。これは単にナショナリズムの問題ではない。追悼碑は歴史の中で疎外、排除された「労働の歴史」に対する記憶と追悼、そして連帯の心も込められている。この大事な歴史を全くなかったように消そうとしていることは、日本社会の自由と民主主義のためにも非常に危険な信号である。問題は警告を知らせるその信号まで壊れたのではないかと懸念される。反省し記憶する能力さえ失った社会なら、私たちはどんな未来を想像できるだろうか。

1884年、朝鮮において「甲申政変」が失敗すると、福沢諭吉は「悪い隣人を断る」と言いながらアジアの友人を捨てて帝国主義に駆けつけて行った。その結果がどうなったかを私たちはよく知っている。数千万の民衆を死に追い込み、平和を破壊したのではないか。再びそのような過ちを繰り返してはいけない。私たちは日本がアジアの隣国として残ることを心から望んでいる。そうしなければならない。日韓をはじめアジア市民たちの連帯を通じて、追悼碑が元の場所で守られることを応援し、群馬県当局の覚醒を強く求める。

2021年9月2日

強制動員問題解決と対日過去清算のための共同行動(キョレハナ・勤労挺身隊ハルモと共にする市民の会・南北歴史文化交流協会・大韓仏教曹溪宗民族共同体推進本部・民族問題研究所・民主社会のための弁護士会の過去使清算委員会・靖国反対共同行動韓国委員会・朝鮮学校と共にする人々「モンダンヨンピル」・青年時代旅行・平沢原爆被害者二世の会・平和の踏み石・フォーラム「真実と正義」・太平洋戦争被害者補償推進協議会・韓国YMCA全国連盟・陝川平和の家・興士団・1923韓日在日市民連帯・KIN地球村同胞連帯)、全国民主労働組合総連盟、韓国労働組合総連盟